

高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究

HAYASHI, Sonoko / 林, 園子

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

2013-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008754>

高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究

A Study on a Consciousness of the Physical Education and the Sport on High School Student

林 園 子 (法政大学)
Sonoko Hayashi

Key Word. (キーワード)
高校生、体育授業、運動・スポーツ

I. 緒言

平成 21 年 3 月告示、平成 25 年 4 月より完全実施される高等学校新学習指導要領¹⁹⁾における保健体育の教科目標には「生涯にわたって運動に親しむ」という文言が新たに加わった。今日、体力及び運動能力の低下、体育授業以外で運動・スポーツを行う者行わない者の二極化などの問題に対して明るい兆しが見えるといわれているものの、依然として深刻な問題であることから、学校体育は生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成とともに、体力の向上を図ることが重視されている。

学校体育は、すべての児童生徒が生涯にわたって運動やスポーツに親しむために必要な素養と健康・安全に生きていくために必要な身体能力や知識などを身につける場であるとしている。また、文部科学省では、「決められた時間外において運動・スポーツをしたいと思うためには、『楽しさ』を感じる事が不可欠である」としている。つまり、これは生涯にわたって運動・スポーツをしたいと思うためにも体育授業で運動・スポーツの楽しさを味わうことのできる機会やきっかけをつくる場となることが重要であると言える。

西原 (2006)⁷⁾ は、体育授業における「楽しさ」とは常に大切にされるべき方向目標であり、結果として期待すべきものであると述べている。すなわち、人に勝つ楽しさ、物事を達成する楽しさ、克服する楽しさ、模倣する楽しさ、表現する楽しさなどを示す「運動・スポーツの特性に触れる喜び」が楽しさである。児童生徒がこの特性を十分に味わうために一定の体力や身体能力を確保し、技術や戦術、ルール、マナー、人間関係などの知識をもつことのできる体育授業の展開が求められており、これらの特性に触れることを無視して「楽しさ」と呼ぶことはありえないとしている。現在、この「楽しさ」における体育授業を展開させる工夫について様々な研究や実践が行われている。

文部科学省 (2010)¹⁷⁾ が、平成 20 年度より全国の小学 5 年生から中学 2 年生を対象に実施する「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」において、中学生は、運動・スポーツを行う者と行わない者の「体力水準」も二極化傾向にある結果を示している。さらには、体育授業以外は運動・ス

ポーツを行っていない者が男女ともに半数以上いることが明らかとなっている。このような状況を作り出している原因の一つに生徒達の「体育授業への取組み意識」の低下が考えられるが、同調査の報告によると、「体育授業は楽しいか」の質問に対して、小学生は約 6 割、中学生も約 5 割の者が「楽しい」と回答している。また、運動・スポーツに体育授業以外あまり関わっていない者でも楽しさを感じながら授業に参加している者が半数以上いるという結果から、体力の低下や日常生活における総運動時間の短さなどの直接的な原因に体育授業の展開方法の悪さが関わっているとは考えにくく、体育授業は運動・スポーツの好き嫌い、得意不得意、体力の有無など関係なく運動・スポーツの特性に触れて楽しむことのできる場であるといえる。しかし、ここまでの見解は中学生までのことであり、実際に高校生における現状についての調査を行っている先行研究は数少ない。

本研究では、高校生における「体育授業」に着目し、高校生の体育授業への意識の実態と高校生が求める生涯にわたって運動・スポーツに親しむための効果的な体育授業の検討をすることを目的とした。

II. 研究の方法

1. 調査実施及び調査方法

本研究の調査は、東京都・埼玉県・神奈川県に所在する高等学校 3 校全 454 名 (男子 194 名、女子 260 名) を対象に実施した。

主な調査内容は、生徒の基本的な特性を把握する「日常生活状況」、生徒の運動・スポーツとの関わりを把握するための「運動・スポーツ特性」、生徒の運動・スポーツとの関わりを把握するための「運動・スポーツ特性」「運動・スポーツの価値観」、生徒の体育授業への意欲や態度を把握するための「体育授業への意識」を質問紙法で調査した。具体的な概要は表 1 に示すとおりである。

本研究の鍵となる「運動・スポーツの価値観」は、藤谷ら (2004)¹⁴⁾ が「よい体育授業」の構成要因として、運動技能・運動能力の向上、有能感、自信などを意味する「成果」、授業に対する意欲・関心、明るい雰囲気などを意味す

表1 調査方法の概要

調査方法	アンケート	日常生活状況		運動・スポーツ特性	
調査内容	基本的特性 運動・スポーツ特性 日常生活状況 体育授業への意識 運動・スポーツ意識	主な 項目内容	①毎日、学校生活が楽しい	①運動・スポーツをすることが好きである	
			②学校以外の日常生活が楽しい	②運動・スポーツが得意である	
			③自分は大変元気である	③体力に自信がある	
			④将来への夢や希望がある		
対象者	高校1～3年生	体育授業への意識		運動・スポーツの価値観	
期 間	平成24年5月下旬～6月上旬 454名 有効回答数454名(100.0%)		①体育の授業が好きである	①自分にとって運動・スポーツは「必要だ」と感じる	
			②毎回、体育の授業が楽しい	②運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる	
				③運動・スポーツは「楽しい」と感じる	
				④運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことがある	
				⑤自分の運動能力をもっと高めたいと感じる	

る「楽しさ」、約束が守られている授業、運動・スポーツのルールやマナーを守って学習できる授業などを意味する「社会的態度の学び方」、仲間とともに学習する効果の大切さを意味する「協力」、学習に関わる諸条件の整備などを意味する「学習環境」の5つが重要な要因であることを明らかにしており、「よい体育授業」の構成要因の適切性において、教師はよりよい体育授業をつくるために「成果」「学習環境」「社会的態度の学び方」を重視し、生徒は「楽しさ」を重視することであると述べている。教師と生徒の考えに相違がみられた結果を踏まえ、今回、この生徒が重視する「楽しさ」に着目し、生徒が体育授業から得ることのできると考える運動・スポーツの特性の『自分にとって運動・スポーツは『必要だ』と感じる』『運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる』『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことがある』『自分の運動能力をもっと高めたいと感じる』の5項目を「運動・スポーツの価値観」として設定した。有効回答数は454名(100.0%)であった。調査期間は、平成24年5月から6月に行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. 高校生の運動・スポーツに対する諸特性

(1) 運動・スポーツ意識

表2は、高校生の運動・スポーツに対する意識状況を示している。高校生の運動・スポーツにおける「好き嫌い」「意欲への有無」「得意不得意」は、文部科学省において調査されている項目でもあり、実際の生徒の運動・スポーツに取り組む姿勢を把握するための指標となりうるものである。

運動・スポーツの「好き嫌い」において、全体では「好き」68.1% (n=309)、「嫌い」は14.8% (n=67)であり、全体の約7割近くの者が肯定的にとらえていた。性別間では、「好き」と感じている者が男子は7割強、女子は6割と男子の方が多い結果を示した。運動・スポーツの「得意不得意」にお

いて、全体では「得意」30.8% (n=140)、「不得意」35.2% (n=160)とほぼ同率であった。性別間では、男子は「得意」42.3% (n=82)、女子は「不得意」43.5% (n=113)において多い結果となり、男女の意識に差がみられた。

「体力の自信」において、全体では「ある」21.8% (n=99)、「ない」47.8% (n=217)と約半数の者が否定的にとらえていた。性別間では、「ない」と感じている者が男子は4割、女子は5割とやや女子の方が多い結果を示した。

以上3つの意識調査から、男子は体力に不安を抱えながらも、運動・スポーツに対する意欲は高いが、女子は意欲があるものの、実際に活動をなると、技能が未熟であったり、ついていけないなど運動・スポーツにおける身体能力の低さを実感しており、運動・スポーツとの関わりにおいて消極的な姿勢がうかがえる。

(2) 体育授業への意識

表3は、高校生の体育授業に対する意識状況を示している。今回は、授業に参加するための意欲や、やる気をもつことにより感じる「好き嫌い」と授業で展開される内容に触れることにより感じる「楽しさの有無」の2つの意識について調査を行った。

体育授業における「好き嫌い」において、全体では「好き」59.3% (n=269)、「嫌い」12.3% (n=56)であり、全体の約6割の者が肯定的にとらえていた。

性別間では、「好き」と感じている者が、男子は6割強、女子は5割と男子の方が多い結果を示した。

体育授業における「楽しさの有無」において、全体では「楽しい」52.9% (n=240)、「楽しくない」13.0% (n=59)であり、全体の5割の者が肯定的にとらえていた。性別間では、「楽しい」と感じている者が男子6割、女子4割強と男子の方が多い結果を示した。

これからのことから、男子は体育授業に臨む姿勢は概ね良好であるが、女子は男子に比べ「好き」「楽しい」の回答に対して少ない結果であったことから、授業の中で運動・

表2 運動・スポーツ特性

質問項目		男子 N=194		女子 N=260		全体 N=454		χ^2 検定
		n	%	n	%	n	%	
運動・スポーツをすることが好きである	好き	148	76.3	161	61.9	309	68.1	$\chi^2=11.124$ DF=2 P<0.01 **
	どちらともいえない	27	13.9	51	19.6	78	17.2	
	嫌い	19	9.8	48	18.5	67	14.8	
運動・スポーツが得意である	得意	82	42.3	58	22.3	140	30.8	$\chi^2=26.035$ DF=2 P<0.001 ***
	どちらともいえない	65	33.5	89	34.2	154	33.9	
	不得意	47	24.2	113	43.5	160	35.2	
体力に自信がある	ある	58	29.9	41	15.8	99	21.8	$\chi^2=14.281$ DF=4 P<0.01 **
	どちらともいえない	58	29.9	80	30.8	138	30.4	
	ない	78	40.2	139	53.5	217	47.8	

 : 7割以上8割未満

 : 6割以上7割未満

表3 体育授業への意識

質問項目		男子 N=194		女子 N=260		全体 N=454		χ^2 検定
		n	%	n	%	n	%	
体育の授業が好きである	好き	130	67.0	139	53.5	269	59.3	$\chi^2=8.488$ DF=2 P<0.05 *
	どちらともいえない	44	22.7	85	32.7	129	28.4	
	嫌い	20	10.3	36	13.8	56	12.3	
毎回、体育の授業が楽しい	楽しい	120	61.9	120	46.2	240	52.9	$\chi^2=11.027$ DF=2 P<0.01 **
	どちらともいえない	53	27.3	102	39.2	155	34.1	
	楽しくない	21	10.8	38	14.6	59	13.0	

 : 6割以上7割未満

スポーツに対する魅力を感じる場面が少ない状況にあると考える。

(3) 運動・スポーツの価値観

表4は、高校生が自分にとって運動・スポーツの価値をどのようにとらえているのかを示した結果である。全体では、運動・スポーツの「必要不必要」は、94.9% (n=431)、「有能感(できるできない)の有無」85.7% (n=389)、「楽しさの有無」90.3% (n=410)、「日常生活への活用の有無」75.6% (n=343)、「運動能力欲求の有無」94.3% (n=428)と全ての項目において高い確率で肯定的な回答(「とても思う」「思う」を合わせた回答)が多い結果を示した。性別間において、 χ^2 検定の結果より分散に有意な差がみられた項目は、「必要不必要」「楽しさの有無」の項目であった。「必要不必要」において、男子94.3%(n=183)、女子95.4%(n=248)とどちらもほぼ全員ではあるが、やや女子の方が「必要」

と感じている者が多かった。「楽しさの有無」において、男子92.8% (n=180)、女子88.5% (n=230)と男子の方が「楽しい」と感じている者が多かった。

これらのことから、男女問わず高校生は自分にとって運動・スポーツに触れることは生きていく上で、価値あるものであると認識しているといえる。

表4 運動・スポーツの価値観

質問項目			男子 N=194		女子 N=260		全体 N=454		χ^2 検定
			n	%	n	%	n	%	
自分にとって運動・スポーツは 「必要だ」と感じる	4	とても思う	119	61.3	128	49.2	247	54.4	$\chi^2=7.998$ DF=3 P<0.05 *
	3	思う	64	33.0	120	46.2	184	40.5	
	2	あまり思わない	9	4.6	10	3.8	19	4.2	
	1	全く思わない	2	1.0	2	0.8	4	0.9	
運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる	4	とても思う	115	59.3	137	52.7	252	55.5	$\chi^2=4.425$ DF=3 n.s
	3	思う	51	26.3	86	33.1	137	30.2	
	2	あまり思わない	26	13.4	30	11.5	56	12.3	
	1	全く思わない	2	1.0	7	2.7	9	2.0	
運動・スポーツを「楽しい」と感じる	4	とても思う	101	52.1	106	40.8	207	45.6	$\chi^2=18.722$ DF=3 P<0.001 ***
	3	思う	79	40.7	124	47.7	203	44.7	
	2	あまり思わない	13	6.7	26	10.0	39	8.6	
	1	全く思わない	1	0.5	4	1.5	5	1.1	
運動・スポーツを通して 日常生活に役立つことを学ぶことがある	4	とても思う	69	35.6	47	18.1	116	25.6	$\chi^2=6.778$ DF=3 n.s
	3	思う	81	41.8	146	56.2	227	50.0	
	2	あまり思わない	40	20.6	63	24.2	103	22.7	
	1	全く思わない	4	2.1	4	1.5	8	1.8	
自分の運動能力をもっと高めたいと感じる	4	とても思う	129	66.5	148	56.9	277	61.0	$\chi^2=5.415$ DF=3 n.s
	3	思う	53	27.3	98	37.7	151	33.3	
	2	あまり思わない	10	5.2	12	4.6	22	4.8	
	1	全く思わない	2	1.0	2	0.8	4	0.9	

:9割以上

:8割以上9割未満

:7割以上8割未満

2. 体育授業への意識と運動・スポーツの価値観との関係

(1) 体育授業の好き嫌いとは運動・スポーツの価値観

表5は、体育授業への意識である「体育の授業が好きである」と運動・スポーツの価値観5項目をクロス集計した結果を男女別に示したものである。価値観の5項目中、『自分にとって運動・スポーツは「必要だ」と感じる』『運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる』『自分の運動能力をのっと高めたいと感じる』の3項目において「性差」、体育授業の「好き嫌い」関係なく強く感じていた。

性別間では、価値観の項目である『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』において、男子は体育授業が『好き』で、かつ『運動・スポーツを「楽しい』』と感じる者が98.5% (n=128)、体育授業が『嫌い』で、かつ『運動・スポーツを「楽しい』』と感じる者が60.0% (n=12) と体育授業の好き嫌いに関係なく運動・スポーツを楽しく行っている者が多い結果を示した。一方、女子は、体育授業が『好き』で、かつ『運動・スポーツを「楽しい』』と感じる者が99.3% (n=138) であったが、体育授業が『嫌い』な者のうち、55.5% (n=20) は『運動・スポーツを「楽しくない』』と感じている結果を示した。

価値観の項目である『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことがある』において、体育授業が『好き』で、かつ『日常生活に役立つ』と感じる者が男子は86.1% (n=112)、女子は87.1% (n=121) と男女とも約9割近くの者が肯定的な回答を示した。しかし、体育授業が『嫌

い』な者のうち、男子は60.0% (n=12)、女子は61.1% (n=22) が『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことは「ない』』と感じている結果を示した。

これらのことから、男子は、体育授業に左右されることなく運動・スポーツの楽しみ方を理解しているように見受けられるが、体育授業によって運動・スポーツの特性に触れ、そこから得る「楽しさ」が直接生徒自身の日常生活に役立つものとして結びついていない傾向がある。男子における体育授業は、運動・スポーツから学ぶ技能や戦術、ルール、マナー、人間関係などの知識を日常生活でも大いに生かすことのできる具体的な実践の場として提供をすることが必要であると考え。女子は、体育授業を通して、運動・スポーツの楽しさや実用性をみいだすことができていない傾向が見受けられるため、女子における体育授業は、運動・スポーツを通して、勝敗で味わう感情、達成・克服・模倣・表現から得る楽しさといった根本的な運動・スポーツの特性に触れることのできる内容の展開が必要であると考え。

表5 体育授業への意識と運動・スポーツの価値観の関係(体育授業の好き嫌い)

自分にとって運動・スポーツは「必要だ」と感じる

男子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	95	73.1	17	38.6	7	35.0	X ² =28.289 DF=6 P<0.001 ***
思う	30	23.1	24	54.5	10	50.0	
あまり思わない	3	2.3	3	6.8	3	15.0	
思わない	2	1.5	0	0.0	0	0.0	

女子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	90	64.7	32	37.6	6	16.7	X ² =57.203 DF=6 P<0.001 ***
思う	48	34.5	50	58.8	22	61.1	
あまり思わない	1	0.7	3	3.5	6	16.7	
思わない	0	0.0	0	0.0	2	5.6	

運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる

男子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	82	63.1	25	56.8	8	40.0	X ² =20.723 DF=6 P<0.01 **
思う	31	23.8	14	31.8	6	30.0	
あまり思わない	17	13.1	5	11.4	4	20.0	
思わない	0	0.0	0	0.0	2	10.0	

女子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	90	64.7	36	42.4	11	30.6	X ² =23.845 DF=6 P<0.01 **
思う	32	23.0	37	43.5	17	47.2	
あまり思わない	14	10.1	11	12.9	5	13.9	
思わない	3	2.2	1	1.2	3	8.3	

運動・スポーツは「楽しい」と感じる

男子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	86	66.2	13	29.5	2	10.0	X ² =61.474 DF=6 P<0.001 ***
思う	42	32.3	27	61.4	10	50.0	
あまり思わない	2	1.5	4	9.1	7	35.0	
思わない	0	0.0	0	0.0	1	5.0	

女子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	86	61.9	17	20.0	3	8.3	X ² =125.567 DF=6 P<0.001 ***
思う	52	37.4	59	69.4	13	36.1	
あまり思わない	1	0.7	9	10.6	16	44.4	
思わない	0	0.0	0	0.0	4	11.1	

運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことができる

男子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	57	43.8	10	22.7	2	10.0	X ² =53.048 DF=6 P<0.001 ***
思う	55	42.3	20	45.5	6	30.0	
あまり思わない	18	13.8	14	31.8	8	40.0	
思わない	0	0.0	0	0.0	4	20.0	

女子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	39	28.1	7	8.2	1	2.8	X ² =53.715 DF=6 P<0.001 ***
思う	82	59.0	51	60.0	13	36.1	
あまり思わない	18	12.9	26	30.6	19	52.8	
思わない	0	0.0	1	1.2	3	8.3	

自分の運動能力をもっと高めたいと感じる

男子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	100	76.9	21	47.7	8	40.0	X ² =23.948 DF=6 P<0.01 **
思う	23	17.7	20	45.5	10	50.0	
あまり思わない	6	4.6	3	6.8	1	5.0	
思わない	1	0.8	0	0.0	1	5.0	

女子	好き		どちらでもない		嫌い		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	97	69.8	41	48.2	10	27.8	X ² =57.198 DF=6 P<0.001 ***
思う	42	30.2	40	47.1	16	44.4	
あまり思わない	0	0.0	3	3.5	9	25.0	
思わない	0	0.0	1	1.2	1	2.8	

	:9割以上		:8割以上9割未満
	:7割以上8割未満		:6割以上7割未満
	:5割以上6割未満		

(2) 体育授業の楽しさの有無と運動・スポーツの価値観

表6は、体育授業への意識である「毎回、体育の授業が楽しい」と運動・スポーツの価値観5項目をクロス集計した結果を男女別に示したものである。価値観の5項目中、『自分にとって運動・スポーツは「必要だ」と感じる』『運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる』『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』『自分の運動能力をもっと高めたいと感じる』の4項目において「性差」、体育授業の「楽しさ

の有無」に関係なく強く感じていた。

性別間では、価値観の項目である『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことができる』において、体育授業が『楽しい』で、かつ『運動・スポーツを通して日常生活に「役立つ」と感じる者が男子は87.5% (n=105) (「とても思う」「思う」を合わせた回答)、女子は74.1% (n=103) と多くの者が肯定的な回答を示した。しかし、体育授業が『楽しくない』者のうち、男子は61.9% (n=13)、

女子は55.6% (n=20) が『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことは「ない」』と感じている結果を示した。

これらのことから、新学習指導要領で謳われている「生涯にわたって運動に親しむ」ことを達成するために体育授業では、生徒自身の生活の一部に運動・スポーツを取り入れるための重要性についての知識や具体的方法を学ぶこと

のできる展開内容を考えることが必要であるといえる。

表6 体育授業への意識と運動・スポーツの価値観の関係(体育授業の楽しさの有無)

自分にとって運動・スポーツは「必要だ」と感じる

男子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	88	73.3	23	43.4	8	38.1	X ² =30.292 DF=6 P<0.001 ***
思う	27	22.5	28	52.8	9	42.9	
あまり思わない	3	2.5	2	3.8	4	19.0	
思わない	2	1.7	0	0.0	0	0.0	

女子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	81	58.3	38	44.7	9	25.0	X ² =40.418 DF=6 P<0.001 ***
思う	38	27.3	59	69.4	23	63.9	
あまり思わない	1	0.7	4	4.7	5	13.9	
思わない	0	0.0	1	1.2	1	2.8	

運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる

男子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	73	60.8	31	58.5	11	52.4	X ² =5.484 DF=6 n.s
思う	31	25.8	15	28.3	5	23.8	
あまり思わない	16	13.3	6	11.3	4	19.0	
思わない	0	0.0	1	1.9	1	4.8	

女子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	83	59.7	37	43.5	17	47.2	X ² =28.299 DF=6 P<0.001 ***
思う	22	15.8	49	57.6	15	41.7	
あまり思わない	13	9.4	12	14.1	5	13.9	
思わない	2	1.4	4	4.7	1	2.8	

運動・スポーツは「楽しい」と感じる

男子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	82	68.3	16	30.2	3	14.3	X ² =62.107 DF=6 P<0.001 ***
思う	37	30.8	32	60.4	10	47.6	
あまり思わない	1	0.8	5	9.4	7	33.3	
思わない	0	0.0	0	0.0	1	4.8	

女子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	78	56.1	24	28.2	4	10.5	X ² =93.806 DF=6 P<0.001 ***
思う	38	27.3	68	80.0	18	47.4	
あまり思わない	4	2.9	10	11.8	12	31.6	
思わない	0	0.0	0	0.0	4	10.5	

運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことがある

男子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	53	44.2	14	26.4	2	9.5	X ² =39.207 DF=6 P<0.001 ***
思う	52	43.3	23	43.4	6	28.6	
あまり思わない	15	12.5	15	28.3	10	47.6	
思わない	0	0.0	1	1.9	3	14.3	

女子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	36	25.9	8	9.4	3	8.3	X ² =39.439 DF=6 P<0.001 ***
思う	67	48.2	64	75.3	15	41.7	
あまり思わない	17	12.2	28	32.9	18	50.0	
思わない	0	0.0	2	2.4	2	5.6	

自分の運動能力をもっと高めたいと感じる

男子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	89	74.2	31	58.5	9	42.9	X ² =12.051 DF=6 n.s
思う	24	20.0	18	34.0	11	52.4	
あまり思わない	6	5.0	3	5.7	1	4.8	
思わない	1	0.8	1	1.9	0	0.0	

女子	楽しい		どちらでもない		楽しくない		X ² 検定
	n	%	n	%	n	%	
とても思う	84	60.4	49	57.6	15	41.7	X ² =50.583 DF=6 P<0.001 ***
思う	35	25.2	49	57.6	14	38.9	
あまり思わない	1	0.7	2	2.4	9	25.0	
思わない	0	0.0	2	2.4	0	0.0	

	:9割以上		:8割以上9割未満
	:7割以上8割未満		:6割以上7割未満
	:5割以上6割未満		

2. 「体育授業への意識」と「運動・スポーツの価値観」の規定関係

図1～図4は、「体育授業への意識」と「運動・スポーツの価値観」の関係性をより確実に検討することから、高校生における「体育授業への意識」を規定する「運動・スポーツの価値観」を明らかにするために、「体育の授業が好きである」「毎回、体育の授業が楽しい」の各2項目を目的変数とし、「運動・スポーツの価値観」の5項目を説明変数としてそれぞれ重回帰分析を行った。係数が正の場合、説明変数に対する評価が高いほど「好き・楽しい」と感じる傾向が高く、評価が低いほど「嫌い・楽しくない」と感じる傾向が高いと解釈をした。結果、男女ともにそれぞれ特徴的な影響がみられた。

(1) 男子における規定力

図1は、男子における「体育の授業が好きである」及び

図2は、「毎回、体育の授業が楽しい」に関する規定要因を比較した。分散比は0.1%水準で有意差があり規定関係をもつことを示している。

図1において、『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』及び『運動・スポーツを通して日常生活に役立つことを学ぶことができる』の意識が高いほど体育授業は「好き」と感じる傾向がみられた。

図2において、『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』及び『運動・スポーツは「できる」方が良いと感じる』の意識が高いほど体育授業は「楽しい」と感じる傾向がみられた。すなわち、男子は運動・スポーツの技能を確実に身につけることができ、自分に自信をもち、運動・スポーツの特性（勝敗・達成・克服・模倣・表現など）に触れ、将来、社会においても利用できる知識や実用的な実践を体育授業に求めていると考える。

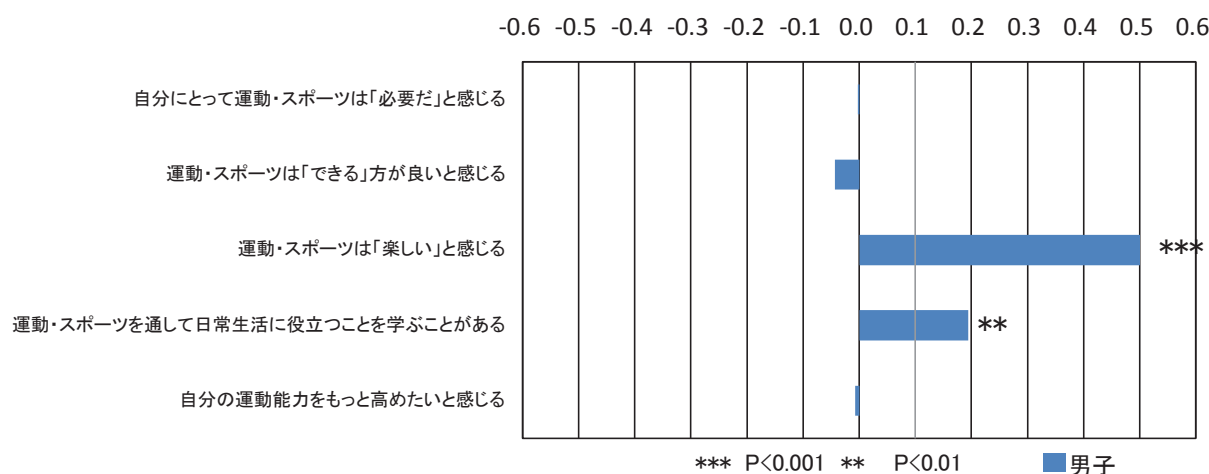


図1 「体育の授業が好き」の規定要因【男子】

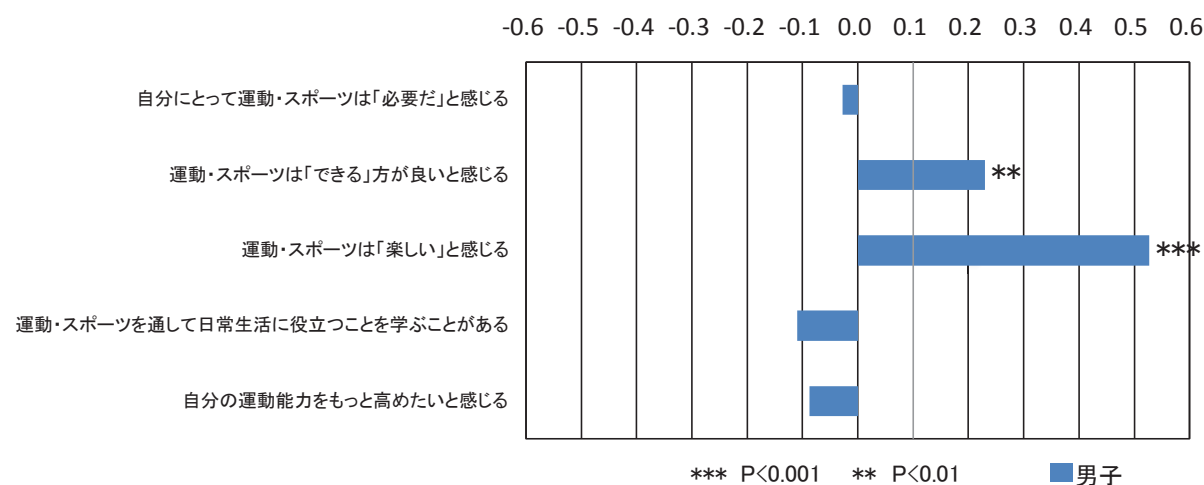


図2 「毎回、体育の授業が楽しい」の規定要因【男子】

(2) 女子における規定力

図3は、女子における「体育の授業が好きである」及び図4は、「毎回、体育の授業が楽しい」に関する規定要因を比較した。分散比は0.1%水準で有意差があり規定関係をもつことを示している。

図3において、『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』及び『自分の運動能力をもっと高めたいと感じる』の意識が高いほど体育授業は「好き」と感じる傾向がみられた。

図4において、『運動・スポーツは「楽しい」と感じる』の意識が高いほど体育授業は「楽しい」と感じる傾向がみられた。すなわち、女子は先の結果でも述べたように、運動・スポーツにおける身体能力や体力の低さを実感していることから、「運動能力に対する向上が実感でき、運動・スポーツの特性にひとりひとりが個に応じて触れ、他人と比べるのではなく自分なりに楽しむことのできる体育の授業を求めていると考える。

IV. 結論

本研究は、高校生の体育授業及び運動・スポーツの意識の関連から、高校生が求める効果的な体育授業について検討した。結果は以下のように要約される。

1. 「体育授業への意識」が生徒自身の感じている「運動・スポーツの価値」に深い関わりがあることが明らかとなった。
2. 「体育授業への意識」と「運動・スポーツの価値観」との分析より、自分が生きていく上で運動・スポーツの必要性の有無が体育授業への意識に影響を及ぼし、体育授業への取り組むための具体的な方向性が示唆された。すなわち、男子は、運動・スポーツを通して学び得ることができる技能や戦術、ルール、マナー、人間関係などの知識を確実に身につけ、この身につけた知識や能力を日常生活でも活用することができる内容、女子は、勝敗、

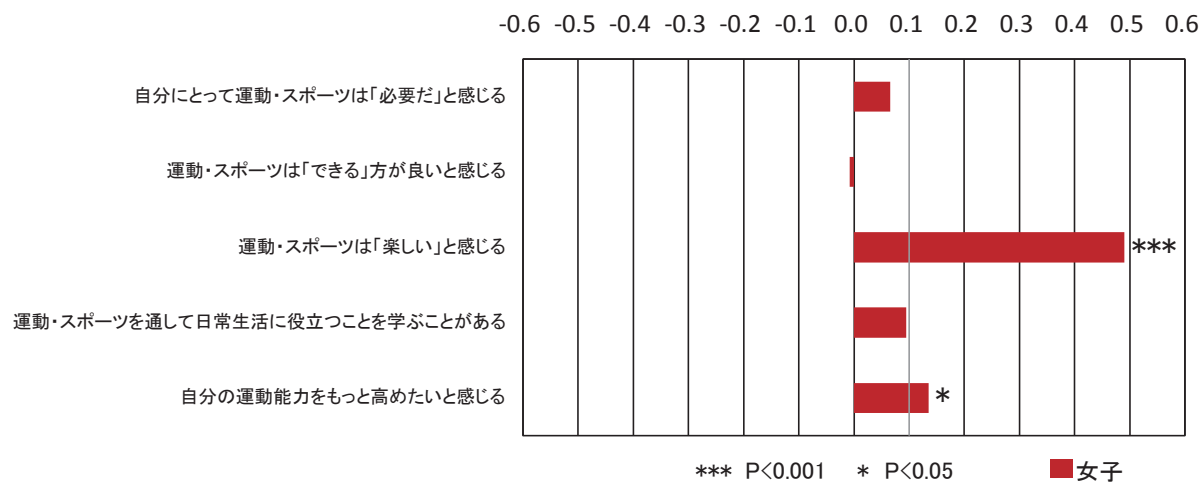


図3 「体育の授業が好き」の規定要因【女子】

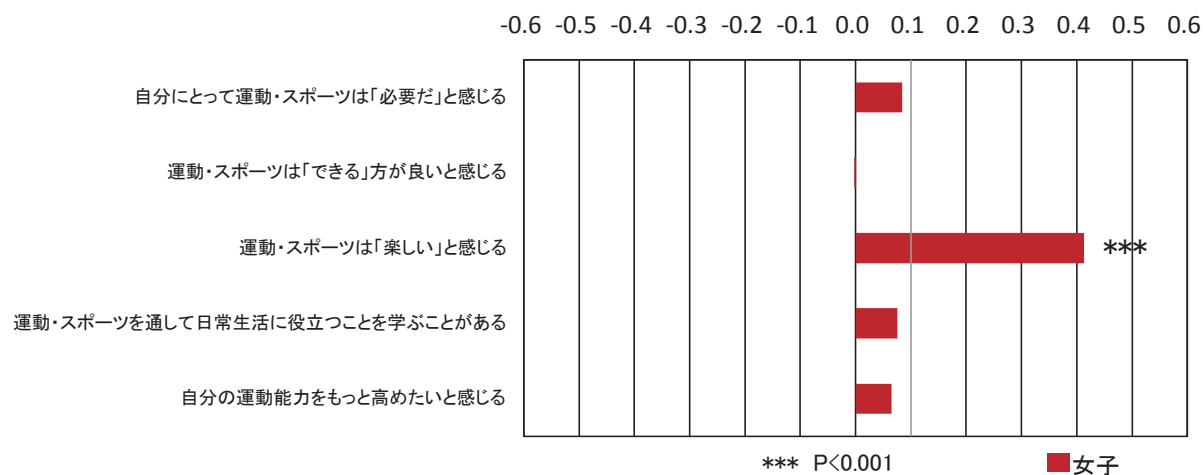


図4 「毎回、体育の授業が楽しい」規定要因【女子】

達成、克服、模倣、表現から得ることのできる真の運動・スポーツの楽しさに自分自身なりの味わい方を養い、かつ運動能力を高めることができる内容を含む体育授業を展開することが生涯にわたって運動・スポーツに親しむための重要なポイントとなることを示した。

今後の課題として、本研究で得られた結果をもとに、高校生における体育授業の実践的な展開を行うための具体的内容の検討が必要であろうと考える。

V. 参考文献

- 1) 子どもの成育環境分科会（2011） 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて - 成育方法の課題と提言 - 日本学術会議。
- 2) 下坂剛（2001） 青年期の各学校段階における無気力感の検討、教育心理学研究第 49 巻第 3 号、p.305-313。
- 3) 東京都教育委員会子供体力向上推進本部（2010） 総合的な子どもの基礎体力向上方策 第 1 次推進計画、東京都教育庁指導部指導企画課。
- 4) 東京都教育委員会（2011） 平成 23 年度児童・生徒の日常生活活動に関する調査。
- 5) 東京都教育委員会（2012） 都立高校の現状把握に関する調査結果。
- 6) 西田保、澤淳一（1993） 体育における学習意欲を規定する要因の分析、教育心理学研究第 41 巻第 2 号、p.125-134。
- 7) 西原康行（2006） 体育の意義の変遷と体育教師の力量の関係性、現代社会文化研究第 37 巻、p.19-28。
- 8) 林園子、畑攻、前田佳奈他（2007） 子どもの基礎基本運動の習熟と生活習慣・運動習慣・意欲に関する研究、日本体育学会第 58 回大会予稿集、p.242。
- 9) 林園子、畑攻、前田佳奈他（2008） 子どものスポーツのサービス内容とマネジメント（1） - 子どものスタイルと運動習熟状況からの検討 -、日本体育学会第 59 回大会予稿集、p.164。
- 10) 林園子、畑攻、田川絵梨他（2010） スポーツマネジメントと子どものスポーツ教育（1） - 子どもの総合的スポーツ力の育成の検討 -、日本体育学会第 61 回大会予稿集、p.165。
- 11) 林園子（2011） 中学生における運動・スポーツ活動が日常生活の充実度に与える影響に関する研究、東京家政大学研究紀要第 52 集（1）、p.47-54。
- 12) 林園子、池田延行、田川絵梨他（2011） 中学生の日常生活におけるスポーツの機能とマネジメントに関する研究、日本体育学会第 62 回大会予稿集、p.166。
- 13) 東博文他（2001） 某進学高校生における日常生活への影響要因 - 部活動との関係を中心として -、鹿屋体育大学学術研究紀要第 25 号、p.9-17。
- 14) 藤谷かおる、出村慎一他（2004） 高等学校における「よい体育授業」の構成要因及びその評価項目の内容の適切性：教師と生徒観の比較、体育学研究第 49 巻、p.471-482。
- 15) 文部科学省（2002） 子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）、中央教育審議会。
- 16) 文部科学省（2009） 高校生の現状、学校基本調査。
- 17) 文部科学省（2010） 全国体力・運動能力・運動習慣等調査。
- 18) 文部科学省（2012） 子どもの体力向上のための取組ハンドブック、p.31-33。
- 19) 文部科学省（2009） 高等学校学習指導要領解説保健体育編。